

2006 年夏休み友情のレポーター インドネシア取材

『地球が丸い訳 ~ 共に生きるということ ~』

山口 春香（佐賀県 / 当時 15 歳）

「今回の派遣先として、ジャワ島中部地震の被災地も考えられますが、それについてはどうですか。」

「その土地に行くことでしかわからないことや、学べることもあると思うので、ぜひ、行きたいです。」

6 月に、KnK から一本の電話がきた。友情のレポーターの最終候補にあがった、と。そして電話面接の質問のひとつに、私は上のように答えた。その時は、緊張していて何を質問されて何を答えたのかよく覚えていないけれど、このやりとりは、しっかりと思い出せる。でもまさか本当にこの自分が行くことになるなんて、思ってもみなかった。

このレポートには、私が行ったインドネシア、ジャワ島の 4 つの村について、私を感じたことを、私の言葉で、私の心に任せて書いていこうと思う。

【インドネシア】

ジョクジャカルタ空港に着いた。飛行機の上から見たジャワ島は、「緑がいっぱいで島全体がジャングルのよう」

空港には現地スタッフの荒井康人さん（ヤスさん）と山脇晃明さん、お二人が迎えに来てくださっていた。車に乗って移動していると、見たところ 10 歳くらいの男の子が、信号待ちをしている別の車に寄ってきていた。コップのようなものを右手に持っている。初めて見るその光景に驚いていると、男の子は私たちが乗っている車にも歩いてきた。ドライバーさんの窓の所へ行って、コップを差し出す。ドライバーさんは軽く断っていたが、私には衝撃的だった。そして、「こっちに来ないで」と思った。だって、どうしたらいいのかわからない。

私にとって、「インドネシアに来た」という感覚は、地震の被害でも文化の違いでもなく、一車道で見かけた、たったひとりの男の子だった。

【ウォノクロモへ】

メインストリートを進んだところで、やたらと崩れたブロックを見ることに気付いた。道路わきに、店の前に、屋台のおじさんの後ろに……。 「ああ、地震があったのだ」。初めての国の雰囲気には少しの興奮を抱いていたそのときの私は、いたるところに積み上げられているがれきを見て、今までメディアを通してしか知らなかったその姿にショックを覚えた。「現地に行きたい」と言ったのは、自分ではなかったのか。

とうとう村に着いた。崩れた家やがれきが本当に山のように積み上げられている。仮設された簡素な家やテント。それらが、この地震の被災状況を物語る。四方八方、そうなのだから。

『KUMPUL BOCAH』（インドネシア語で『チルドレンセンター』のこと）と書かれた旗が見える。一体、どんな子どもたちに出会えるのだろう。楽しみだ。

チルドレンセンターのテントの中に、たくさん子どもたちがいる。覚えたインドネシア語であいさつと自己紹介をした。

「nama saya Haruka（私の名前は春香です）」

「panggil saya Haruka.（ハルカと呼んでください）」

すると、みんなは拍手で迎えてくれた。そしてささやかなプレゼント。プレゼントは女の子からのカラフルでにぎやかな絵と、明るい声の歌。そして、ピンクやブルーの紙で作られたペーパーフラワーだ。素直にうれしいと感じた。

そんな温かなウェルカムパーティー。みんなの笑顔や笑い声、その元気の良さに圧倒された。けれども思う。「何かが違う」。

ウォノクロモ村は、村内の建物の9割強が全壊、半壊、きれつ……。何らかのダメージを受けている。なのにみんなが明るい。「ダメージを受けた人は落ち込んでいるのではないか」それは単なる先入観？固定観念？その裏側を見たい。でも、私はどうすることができるのか。

みんなとの散歩。被害を受けた村の様子をまのあたりにする中で、私はひとり、ずっとそんなことを考えていた。

帰りの車の中で、ヤスさんとお話をした。思ったことを言った。初めて見た地震の被災状況や、その中での笑顔に動揺したこと。言葉の壁を感じてしまったこと。けれど、みんなと仲良くなれてうれしかったこと。

「言葉は難しかったけど、笑ってたら、なんか全然そんなの気にならなくて、『国境なき』って本当に良いワードだと思います。」

「うん。でも元々、国境も人が作ったものだしね。法律も、人さえも。」

人の感情に線は要らない。もともと、国境なんてないのだろう。ただ、そう思えた。

【共生の村、グロジョガン】

私が二つ目に訪れたのは、グロジョガンという村。メインストリートから小道を5分程、車に揺られる。人通りが少ない道。もちろん、車の外に目を向けると、崩壊した家、その近くに積み上げられているがれきなど、地震の被害を見ることになる。

村につくと、独立記念日(8月17日)のイベントの続きで、小さな運動会のようなものやっていた。私も参加。あいさつ程度だったこの村の人たちとも、すぐに仲良くなれた。

ここの人たちも、みな笑顔。なぜ?心のもやもやはさらに大きく広がっていく。そして、それに対して、何も見えないもどかしさ。さらに、エドゥケーターのピンさんからの言葉が、また私の心のもやもやを大きくさせた。

「この村は、大きな道から離れていたせいで、政府からの支援がないに等しかった。復興はとても遅れていたし、政府からは一ヶ月の間にカップ麺と水が少ししかこなかった。」

何のための政府だろう。国民が生きていくためじゃないの?この村だけがそういう状況ではない。似た状況の村はまだいくつもいくつもある。私は、難しいこととはわかっていても、この状況を見て、そう思わずにはいられなかった。

村の中を、ヤスさんの案内で歩く。確かに被害は大きい。けれど、心に何か違うものを吸収できた。それは、テントの下で復興作業の休憩をしている村人に出会ったり、家族と一緒に家の周りを片付けている人たちに出会ったりしたからだと思う。力を合わせて何とかしようとしている姿に、悲しみや絶望とはまた別の、希望をみたのだ。

隣人のもとを訪ね、お互いのことを話し合う。そして、互いに協力し合い、互いを補う。そんな、本当に『助け合っている』この村。まるで、村ひとつが家族そのものだ。いつも、ひとりで、ひとりで、と思っていた自分に、『力を合わせることも必要だよ』と教えてくれたようだった。

『共に生きる』それがどんなに力を持つことか、少しずつわかり始めた。実感として。

【ドカラン、トブラタン、二つの村】

小さい子どもたちが多く、2つの村。相変わらず私は圧倒されっぱなしだ。あいさつをしようとしてもなかなか周りが静かにならない。けれど、こんなに元気な様子を見ることができ、少し安心した。もちろん、笑顔の裏には様々な姿があるだろう。けれど、「ここまで元気になった」というお話を聞いて、本当に良かったと思えたのだ。

トブラタンで、日本の昔のあそびを紹介した。「けんけんぱ」だ。最初はみんななかなかあそんでくれなかったけど、しばらくするとみんなで楽しめるようになった。正直、ヤスさんが手助けしてくれなかったらどうなっていたのかわからない。でも、ヤスさんはこんなことを言ってくれた。

「この子たちは、このあそびを明日もあさっても、一週間後も、一年後も覚えているんだよ。そうやって、次の世代に継がれたりとかもある。」

おばあちゃんが出発前に教えてくれたもの。またそうやって私の心は満たされていく。ああ、私の周りには助けてくれる人がたくさんいるんだな、と。

みんなであそんだあとに、女の子と話をした・・・しようとした。しかし、その子は耳が不自由だという。そこで私は、インドネシア語の本を取り出し、会話のできるページを開いた。あとは、表情や、本に書いてある単語で何とかやりとりした。

私が「belajar」(勉強)という単語を指し、指や手、表情を使い、「好き?きらい?」のつもりで、×(バツ)と(マル)をつくり、彼女にきいた。すると、「よく手話がわかったわね」と、彼女の隣にいた女性が言った。私が必死に伝えようとした仕草は手話だったのである。人の気持ちは、こうやって伝わるんだと思った。自分がどうにかしようと思えば、どうにかなる。人の気持ちは、思ったよりも伝わるのだと実感した。

けれど、伝わらないことも多い。気持ちが伝わらない寂しさは、この世界で最も寂しいことのひとつだと思った。

【世界遺産、ボロブドゥール 「どうか、願いを・・・」】

日曜日はみんなで遠足。世界遺産のひとつ、ボロブドゥール寺院だ。移動中のバスの中で、3人くらいの女の子と話をした。その中のひとりに、少し地震のことについて聞いてみた。グロジョガン村の、15歳の女の子。名前はリナ。

もちろん地震があった今、生活は大変だと言う。けがもした。今でも、小さな余震すら怖い、と。でも今日は楽しみ、と言った。私もだよ、リナ。

何百年もの間、この国のことを見守り続けてきたボロブドゥールの階段は、何だか威厳たっぷりだ。この国の歴史が丸ごと、この巨大な寺院につめ込まれているのだ。この地震も含めて。

ボロブドゥールに登り、最上段付近になると少し変わった建物が出てくる。仏像に、かぶさるように造られている、さいの目のような石。中の仏像の小指に、願いごとをしながら触れると、その願いごとが叶うという。私は願った。「どうか、みんなのことを思ってくれる人々が増えますように。」他力本願という言葉もある。そんなの知ってる。けれど、そのときはただ、インドネシアを見わたすこの寺院に、願いを託したかった。「どうかお願い、みんなを見ていて」と。

頂上から見る景色はとてもきれいだった。大地は青々と広がっている。たくましさを感じた。

お土産を売るおじさんやおばさんを振り払いながら階段を下り、昼食のために広場へと歩いた。ウォノクロモの子どもたちとごはんを食べながら何てことないことを話す。ボロブドゥールへ登った感想、好きなこと、趣味、兄弟のこと。もう、友だち、だ。けれども、今ひとつ、勇気が出ない。地震のことを聞いたとする。もし、それで相手を傷付けたら？ つらい思いを引き出してしまったら？ 臆病になる。こんなんじゃいけないと思いつつも、やっぱり、そのことが引っかかってなかなか進もうとしても難しい、と、言い訳する自分がいる。

昼食の前に、短い映画を見ることになった。ボロブドゥールの紹介映画。私を感じたボロブドゥールは偉大なものだった。それを確認できた。

スタッフの人に、「ボロブドゥールはどうだった？」と聞かれた。私はあまりできない英語で必死に答えようとした。けれど、私の力じゃうまく説明できない。自分の甘さを後悔する。どうしようもない。

「ボロブドゥールはすごい。心がおだやかになれた。そんなパワーがあるんですね。まるで、インドネシアそのもの。私、ここが大好きです。」

友情のきっかけも作ってくれた。私には大切な場所、忘れられない場所だ。

【街の中の MSF】

次の日の午前中、ジョクジャ市内の撮影に出かけた。しばらくして、ある大きな広場を見つけた。”MEDECINS SANS FRONTIERES”。国境なき医師団のテントだ。KnK だけじゃない。人に優しい人たちはもっといるのだ、と思えた。心のケアも大切だけど、外傷のケアも必要。この街の人たちは、本当にたくさんのものを必要としている。けれど、一番必要なことを私は知らないといけない。

【初めてのインタビュー】

その後、グロジョガンへと足を運び、初めてのインタビューをした。相手は、日曜日に仲良くなったリナと、あとひとりムスフィ。二人とも、日本でいう中学三年生だ。

地震直後のこと、今の気持ち、家や家族のこと。知りたい気持ちと怖れが頭の中で交錯する。そして、カメラを回す。きっと、こんな不安定な心じゃ相手の心を知ることなんてできない、そんな気がした。

インタビューの後、二人の家に行くことになった。「家を見せて」と尋ねたとき、許可はもらえたけど、二人の顔は暗くなった。ねえ、ごめんね。でも、知りたいんだ。二人のことをもっと・・・みんなのことを、もっと。

リナの家は全部で3棟の仮設家屋があった。もとはひとつだったらしい。ベッドやキッチン、ダイニング。『家族』が生きている。確かに、テラスだったという場所には、木材や欠けたレンガがたくさんある。けれど、“生きて”いる。生きるとはどんなにすごいことなのか、少しわかった気がした。

リナのおばあさんにあいさつをした。顔色から、地震のショックがうかがえる。“生きて”いる。けれど確実に、この地震は多くの人的人生を揺るがしたのだ。

リナの家を後にし、向かったのはムスフィの家。ムスフィの家も、仮設のものだ。ムスフィだけでなく、彼のお父さんも語ってくれた。

彼の家の周辺には、崩れたレンガがいたるところに積み上げられている。それは、私にはあの日のショックに囲まれて暮らしているようにしか見えなかった。お父さんの顔も、彼の顔も、おばあさんの顔も、疲れているように見える。私の立場がいかに重要であるのか、考えさせられた。

【浜辺での友情】

初めてのインタビューの後、グロジョガンの人たちと海へ行った。リナやムスフィも一緒だ。移動の車の中ではインドネシア語教室。とにかく笑い声が絶えない。来てよかった、と思えた。

海岸に座ってフリートークをした。その中で、私は自分の体験を初めて彼らに話した。

2005年、3月。福岡西方沖地震。私も、その大地の震えを体験した。今まで安心してあしをつけていた地面が、突然、暴れ出すのだ。その恐怖は今でも忘れられない。友だちとおしゃべりしていようと、ベッドの上で寝ていようと、それは容赦なく襲ってくる。その後続く、微弱な余震にさえも過敏になる。地震とは、そういうものだ。まして初めてならばなおのこと。だから私は、彼らに言った。

「揺れて、怖かったのね。初めてだったし。しばらくは余震もあってビクビクしてた。だから全部とは言えないけど、少しはみんなの気持ち、わかるかもしれない。」

どれくらい伝わったかはわからない。けれど、波打ち際を歩きながら、リナは私を心配してくれた。私はその温かさに触れて、涙さえ出そうになった。そして、二人で歩き続けながら私はリナに感謝の気持ちを込めて、「今日はありがとう」と言って彼女を軽く抱きしめた。

【眠る子どもたち】

ウォノクロモ。以前みんなとジャランジャラン（散歩）をしたときに見かけたい墓へと足を向けることになった。古い意志のお墓がたくさんある中、新しいお墓を見つけた。今回の犠牲者の方たちだ。この村の犠牲者は24人。24の家族が泣いている。私は目を閉じ、冥福を祈ることしかできなかった。

とても小さく、そして新しいお墓を見た。歳はわからなかったけれども、間違いなく、子どもと呼ばれる年齢の人たちのお墓だ。

眠る子どもたち。彼らには、どんな未来が待っていたのだろう。どんな夢を持っていたのだろう。終わってしまった彼らの歴史は、きっと明るいものだったに違いない。いや、そう思わなければ彼らの死は報われない。

「お墓参りはどうするのですか？」と、エドゥケーターの方に聞いてみた。すると、こちらでは日本のようなお墓参りの習慣はないのだと教えてくれた。「9月（イスラム教の断食月）の前にきれいにするくらいかな。でも、会いたいと思えば、家の中でだって道端でだって会える。神様を通して。」私は、さっき見た子どもたちも、どこ

かで家族とつながっているのだろう、と少しだけ安心した。

【学び場】

ウォノクロモを出た後、グロジョガンで、リナに学校を案内してもらえることになった。

学校に着いた。校門には、警備の人や復興作業に追われ多くの木材をかかえる人たちがいた。崩れが見える校舎。リナの教室は危なくて入れないという。その代わりに、彼女が仮使用しているという教室に向かった。教室そのものはきれいな方だった。しかし、隣を見ると崩れた食堂があるし、上を見ると屋根を歩く男の人が大勢いる。学校、というには物々しい雰囲気だ。

私は、こんな状況で勉強なんてできないかもしれない。今の学校での勉強に、私には目的がない。特別好きな勉強もない。ただ、リナには「語学が好き」という、自信を持って言える目的がある。それが、彼女の「学生」という姿を支えているのだろう。

【村の長】

ドカラン村の村長にお話を聞いた。緊張する。うまく話せない。けれど、村長さんは物腰が穏やかで優しそうだった。ただ、どこか寂し気で、私は、なんとなく地震のせいだろうと思った。

インタビューをしていると、この村での死者がたった一人だったということを知った。他の3つの村と比べることにはなってしまうが、明らかに他の村よりは少ないその数字に、私は勝手に安心した。

インタビューが終わってから、珠理さんが私たちを呼んだ。亡くなったのはこの方のお母さまなのだ、と。私の、「この復興活動の先に、村のどのような姿が見えますか」という質問に、「みんなの結びつきが、共に生きる力が強まった。それがいつまでも続いてほしい」と答えてくれた村長さん。どの村の村長よりも、復興活動にポジティブだという、ドカラン村の村長さん。それは、優しいからだけではない。寂し気な目だったのも、村人に協力的なのも、すべて、彼自身が地震の重みを知っているからなのだ。私は言った。「必ず、この地震のことを、日本に帰ったら伝えてきます」と。

【子どもと大人】

大人の方は、目線が違う。しかし、同じでもある。子どもと比べて、だ。

被災した男の子と、そのお母さんに別々に話を聞いた。男の子は、自分なりの未来を持っていた。お母さんは、仮設の家が自分の家だとは思えない、いつまた希望が持てるかわからないと言っていた。家族を支えたい、と夢を持つ少年。そして、実際に家族を支えなければならない母親。黙って、相づちを打つしかできない私。あまりにも遠くを見続けていたお母さんを見てみると、大人と子どもの世界の違いをつきつけられているようだった。

現地の日本人スタッフであるヤスさんや晃明さんをはじめ、エドゥケーターの方にもお話をうかがった。どの人も、この状況下で“自分にできることがあれば”と今の活動をしているという。そして、「チルドレンセンターを通して、子どもたちにどうなってほしいですか」と聞けば、帰ってくる答えは、「地震前よりも良い状態になってほしい、そうしたい」。今まで私の知らなかったところでたくさんの方が動いていた。その理由はただ一つ。今の状況をみんなでどうにかしよう、それだ。

私もそのひとりだといえるのかもしれない。世界を見て、何とか力になれることをみつけないと、そんな思いで私はこの活動に参加したのだ。けれど、結局はひとりではなせることは少ないと知った。それでも、代わりに得たものは大きかったと思う。まるで、大海に出たようだ。新しいもの、海を越えた友情、生きる意味と力。言葉という限りあるものではどうも表わすことなどできないような気持ちは、私自身初めてだ。

この旅の中で、私は二度、村のことを3つの単語で表わした。

一度目は、「明るい・元気・知りたい」。子どもたちの元気の良さに圧倒されながらも、確かな好奇心に似た探究心を持っていた。

二度目は、「共生・友情・ふるさと」。共に生きることの大切さ。力強い『生』の行動。そして忘れることなど、忘れられるなどありえないほどに、心と心をつないでいる、友情という名の絆。

私は、本当に人生を揺らされた気がしてならない。

【地球が丸い訳】

私は、この10日間で、地球が丸い訳を理解した気がする。それは、私の中での、新たな発見でもある。

たとえば、10 人の人と手をつなぎたいと思ったとき、あなたはどうかつなぐだろうか？ きっと、自然に円になると思う。では、その人数が 100 人だったら？ 1 万人だったら？ 100 万人、65 億人になったら？ 形はずっと一緒。円のまま広がっていく。そしてその、65 億人は地球に沿って広がっていくだろう。これが、私の見つけた、地球が丸い理由だ。

「みんながんばれ」。ある村で、そんな意味の看板を見つけた。がれきの上に立ててある看板だった。助け合い、生きていくことこそが、人間そのものの姿であり、最も人間らしい生き方なのだと思う。

確かに必要とされ、自分もまた必要とする相手がいる。その連鎖こそが、つないだ手を意味する。すべては私自身の価値感からくるものであり、私なりの思いなのだから誰にもこのことを押し付けるつもりなどありはしない。逆に、否定もしてほしくない、けれど、ただ、認めてほしいと思う。15 歳の、ひとりの少女の、今。

ただ、それだけだ。

ある少年が自分の夢を語ってくれた。

「今は、父さんが車の運転をして、人をよく空港に連れて行ってる姿を見る。だから僕は、大人になったらパイロットになって、父さんを飛行機にのせて飛ばしたいんだ」

どうかこの少年の夢が叶いますように。せっかく地球は丸いのだ。お願いします。隣の人を見ていてください。泣いているのなら、そっと手を握ってみてください。その人は、あなたのその行動に救われるかもしれません。可能性は、すぐそこにあります。あなたが起こした行動は、きっとだれかが見ています。あなたがだれかを必要としたときには、きっとその人がかけつけてくれます。それが『助け合い』なのです。

「せっかく地球は丸いだから」

この意味を得たことで、私の 10 日間は成り立ったのだと、そう思います。

2006 年夏休み 友情のレポーター 山口 春香

2006 年夏休み友情のレポーター インドネシア取材

安江 一穂（岐阜県 / 当時 15 歳）

「ジョグジャカルタの夕焼けは、最後に僕らに何かを言いたそうだった。それが何なのかは分からない。ただ、僕の中では暖かいものがゆっくりと動いていた。

ウォノクロモ、トブラタン、ドカラン、そしてグロジョガンのみんなの笑顔が頭から離れない。いや、離れてほしくない。

僕はインドネシアにとっても大切なものをもらった。そんな気がする。

僕の中で物事の見方、というのも大きく変わった。今まで必死に握りしめていたものは、いつの間にか、指の間からこぼれ落ちてしまった。

もっと大切なものを見つけたからだ。

インドネシアでまず、僕らを迎えてくれたのは、ウォノクロモ村の子どもたちの爆発したような元気だった。照りつけるインドネシアの太陽に、負けないくらいの勢いだ。全力で走り、全力で遊ぶ。こんな子どもたちを見るのは久しぶりだった。圧倒されてしまうほどの元気が、僕にはうれしかった。

しかし、村の中を歩いてみると、だんだん暗いものがよりかかってくる。村は地震に破壊され、至る所がれきの山。その光景は、あまりにも無惨なものだ。

家をつくる主要な資材であるレンガが、そこらじゅうに積み重ねられていた。現地スタッフのピンさんが、その内の一つを指して言う。『レンガは時がたつと弱くなる。しかし、新しい資材が足りないため、地震で崩れたそのレンガを使って、新しい家を建てなおすしかないのだ』と。

このウォノクロモ村の家族の数は 320。その各家庭の内、地震の被害を受けたのは全体の 95%にも上るといふ。亡くなった方は 24 人。震災後に、以前と同じように建っていた家はたったの 4 軒だったといふのだ。

この事実には、ただあ然とするよりほかにはなかった。そして単純に、地震に対する怖さを感じた。

ここで子どもたちは暮らしている。

グロジョガン。村に着くと、なにやらレクリエーション大会を行っている。この前日がインドネシアの独立記念日。国内では数日間、様々な催し物があるようだ。

チルドレンセンターのテントの前は、大盛り上がりだった。僕もまよわずエントリー。二種目に参加。本当に楽しい時間が流れた。

しかしここでもやはり、わきに目をやるとそこには崩れた家ばかり。熱かったのが一気に静まるのを感じた。

村の中を見て歩くことにする。村の様子を一言で表わすなら、ぐちゃぐちゃ、だ。すべてが壊れている。

落ちていたレンガを一つ拾う。両手で力を入れると、それはあまりにももろく砕け散った。

グロジョガンには、約700人が住んでいる。地震による死者は11人。聞けば、ほぼ全壊した家屋は全体の90%以上だという。

しかし、どうしてだろう。子どもたちはこんなにも明るく元気だ。地震に何もかもを壊され、怖かったり、悲しかったり、色々なつらい思いがあるはずなのに。彼らの心の中には一体何があるというのだろうか。

日曜日。世界遺産ボロブドゥール遺跡への遠足の日。ウォノクロモ、グロジョガン、トブラタン、ドカラン、それぞれの村から6人ずつのメンバーで大型バスに乗り、ボロブドゥールへ向かう。

僕には一つの不安があった。まったく別の言語、文化がある土地で、どのように人と接し交流すればいいのか、という。

バスの中で3人の子どもと話す機会を得られた。ウォノクロモのRani、グロジョガンのMusfiそしてLinaだ。指差し会話帳を使い、自分のことを精一杯話す。すると、彼らも指でさし僕に話をしてくれる。うれしくなって、どんどん質問をした。趣味のこと、音楽のこと、料理のこと、日本のこと、インドネシアのこと・・・

僕の不安は、いつのまにか吹きとんでしまっていた。こんなにも、気持ちを伝えることが出来たよろこびを感じたのは初めてだった。そしてそのことが、とても嬉しかった。

ボロブドゥールでは、もっとたくさん子どもたちと話すチャンスがあった。下手な英語と、いくつか覚えたばかりのインドネシア語で話しかける。もう不安はなかった。

特に仲がよくなれたのは、グロジョガンのみんな。Musfi、Lina、Julias、Yusuf、Riska、Heniの6人だ。限られた言葉で、できるだけのことを話した。とにかく、笑顔が絶えなかった。

色々な話をするうちに、Linaが地震のことを話してくれた。グロジョガンの6人のうち、5人の家が崩れてしまったという。Linaの家も崩れてしまった。そこまで

言って、Lina はしゃべるのを止めた。Lina のさっきまでの笑顔は、曇りきっていた。恐怖を感じているのが目に見えてわかる。僕には、それ以上何も聞くことができなかった。傷の影が見えたような気がした。

次の日。インタビューをするために、グロジョガン村へ向かった。

ここグロジョガンは、大きな通りから細い道を少し奥に入っていかなければならない。そのため、当初外からは、地震の被害が知られていなかったようだ。

そして、次の言葉を聞き、僕は呆れ返った。震災から一ヶ月後、この村に届いた政府からの支援は、タンク 1 杯の水とインスタントめん 2 つだけだったというのだ。たったのそれだけ。政府からの支援には全く頼れない現状だった。

カメラをまわし、マイクを向けて、Musfi と Lina に話を聞く。やはり、地震に対しての恐怖心というものを、強くもっているようだ。2 人から笑顔は消えていた。

地震があったその時、Musfi は食事中だったようだ。大きな揺れで外へ逃げた。さいわい家族も無事だった。しかし、彼の家は完全に崩れ落ちた。

Musfi に案内してもらい、彼の家を見せてもらおう。Musfi のお父さんが震災前の家の中の様子を話してくれた。しかし、その場所に元の家影は全く無かった。そこには、彼らの暫定的な住む場所と、がれきの山とがあるだけだ。Musfi は、ただの木片や土となってしまった『彼の家』を見つめていた。彼の目にはどう映っているのだろう、台所も居間も寝室も、たくさんの思い出も、一瞬で崩れ落ちた。むなしさや悲しさや怖さも、引きずらずにいることは無理な話だ。彼はどこか遠くを見ているようだった。

Musfi に一つ、大事な質問をした。夢についての質問。僕はこのことを聞くのが心配だった。夢を忘れてしまっただろうか。地震に夢まで壊されてしまっているのではないかとということがずっと怖かった。

しかし、僕のそんな心配など、彼がすぐに流し去ってくれた。笑顔でこう答えてくれたのだ。『中学校の先生になりたい。』

握手をした時の彼の手は暖かく、力強いものだった。

Lina が地震のことを話すとき、彼女の様子は大きく変化する。声がおびえているようだ。

震災があったあの時、Lina もまた家にいた。彼女の家は完全に破壊された。言葉では簡単に「破壊された」と言ってしまう。しかし、その事実を自分の身に想像してみると、そこには計り知れない恐怖と失望感とがある。何もかも奪われてしまうのだ。

彼女自身もケガをして、病院へ行った。近くの病院は人でいっぱいだった。そのため、ジョクジャカルタまで行ったそうだ。病院はケガをした人であふれかえっていたという。

Lina の目には涙が溜まっていた。その目で何を見たのだろうか。

地震は確実に深い傷を残した。彼らの心の中に深い傷を。

それなのに。ふとボロブドゥールでのことを思い出す。Lina も Musfi も Leni も、僕にお土産を買ってくれた。お金が十分にあるはずもない。実際、今日の前にしている Lina の家は一時的につくただけのものだ。こんなやさしさを感じたのは僕自身初めてだった。あたたかいものがこみ上げてくる。地震で被災したのに、この村にはやさしさがあふれている。暖かさに包まれている。そう思った。

少しだけ、最初の問いの答えが見えたような気がした。被災したのに、なぜこんなにも明るく元気なのだろうかという問い。そこには、やさしさ、お互いの支え合いがあるのではないだろうか。一人だけで震災のつらさを乗り越えることは、とてつもなく難しい。しかし、村には絆があり、協力し合って、今まさに困難を乗り越えようとしている。人と人との結びつきの強さというのを感じたし、そこに人々の心の豊かさというのも見えた。これこそ、僕らの国が忘れかけている、大切なものなのだと思う。

その絆や豊かさというものを感じ取れたことがある。Yusuf が夢を語ってくれた時だ。彼には大きな夢がある。飛行機のパイロットになりたい、という夢。彼のお父さんはタクシーの運転手で、Yusuf はよくそのタクシーに乗せてもらっているそうだ。だから、こんどは自分がお父さんを飛行機に乗せてあげたい。そう語る彼は、本当に嬉しそうだった。彼の目はとても輝いていた。

絆や思いやり、支え合い。こういったところに復興への一番大切な鍵が隠されている。僕はそう感じる。村は一体となって一人一人を守ってくれる。そして僕自身も、とても暖かい気持ちになれる。この一体となった支え合い、協力しあうことこそが、これからの未来をつくりだしていく基礎になるのだろうと思う。

そう考えた時に、支援のあり方というのは、どのようなものなのだろう。やはりここにも、あのキーワードが重要なのだと思う。支援は一方的なものではなく、支えあう相互関係の上に成り立って行われるべきであるはずだ。これは僕の理想なのかもしれない。しかし、困難を乗り越えようとする時に、ただ手伝うのではなく、一緒にそれを乗り越えようとするのであれば、それはとても素晴らしいことだと思う。

ここで、具体的な支援の様子というのを考えてみたい。

今の状況として、政府や他の団体からの支援は、4 つの村のうちウォノクロモ村を

のぞいてまったくくない。建物の再建は、村のひとたちで協力して少しずつ行ってはいるが、なかなか進まないのが現実らしい。インドネシアにはもうすぐ雨期がやってくる。震災後初めての雨期だ。今の状態で雨期に入るのには不安があるようだ。衛生状態もあまり良くなく、家も住むに十分なものではない。そこに雨期が訪れるのだから、病気の広がりなどが心配されている。

子どもたちへのメンタル面でのケアも充分ではない。KnK のチルドレンセンター開設から今まで、子どもたちの間で交流が増えるなど落ち着いてきてはいるらしい。しかし今でも子どもたちが恐怖を抱えているのは事実であり、彼らの傷は癒えていない。

グロジョガンのみんなと海岸へ行く機会があった。そこではみんなに、地震のときのことや、今の様子などを自由にしゃべってもらった。

- テントの中は、昼間はとても熱く夜は寒くて、つらいと思うことがある。
- これまでは地震などなかった。だから突然の地震にはとても驚き、どうしていいのか分からなかった。
- 地震の後、津波が来るというウワサが流れ、ケガ人をおいたまま逃げてしまい、置いていかれた人がなくなってしまったこともあったらしい。
- 余震があるたびに恐怖に襲われる・・・

ふと、あることが頭をよぎる。目の前で話してくれている Lina、Musfi、Yusuf、Fatah、Riska、Anggi もみんな、死の恐怖に直面した。生と死が紙一重だった。そう思うと、彼らが無事でいてくれてよかった、みんなと出会えて本当によかった、そんな気持ちが奥深くからわいてきた。

ウォノクロモ村の学校を訪れた。学校とはいっても、テントの中に小さな机と黒板とが置いてあるだけだ。子どもたちはここで勉強している。もとの校舎は地震で崩れかけ、とても使える状態ではない。テントでの勉強を余儀なくされている。テントの中は焼かれるような熱さだ。それぞれ、1年生 14 人、2年生 9 人、3年生 8 人が勉強していた。椅子もないが、ここが彼らの教室だ。自分の教科書を持っている子はいない。何人かの仲間使っているそうだ。教科書のように専門的なものは値段が高く、全く足りていないのだ。

KnK のチルドレンセンターがどんなことをしているのかを聞いた。ここでの教育的なプログラムは大まかな科目、テーマに沿って進められているそうだ。

- ・ AGAMADAN MORAL 宗教や道德に関連するもの
- ・ FISIK 保健や体育的なもの
- ・ BAHASA 言語、主にインドネシア語、英語、アラビア語
- ・ KOGNITIF 知覚、数学的な要素も含む
- ・ SOSIAL, EMOSIONAL 心理面や社会的なもの
- ・ SENI 人間関係など
- ・ KETRAMPILANHIDUP / KEMANDIRAN 芸術、工夫しての図工など

これらを年齢にあわせて行っているそうだ。また、子どもたちの栄養状態が悪いため、ススと呼ばれる、色々な成分を入れた牛乳を配ったりもしていた。「スス、スス」と呼ぶと子どもたちは走ってきて、行列をつくっていた。

インドネシアで僕が得たものの一つに、勉強の意味が少し見えたような気がする。今までの学校での勉強というものに僕は疑問を持っていた。はっきり言ってしまえば、テストのための勉強が大嫌いだった。だから、今回出会った人と、英語やインドネシア語で話す楽しさというのがとても新鮮だった。そしてもっと学びたいと思ったし、もっと学ばなければいけないと感じた。

ホテルのロビーの椅子に腰をかけ、さわがしく流れるジョクジャカルタの街をながめながら考えていた。未来について。僕らにはどんな未来がやってくるのかと。僕の夢も、Musfiの夢もYusufの夢も忘れずにいられるだろうか。僕は、せめて彼らの夢や、夢を見られる環境だけは守りたい。いつになっても、一緒に夢を見ていたい。これが僕の一つの願い。

国境という言葉が頭に浮かんだ。国境とはいったい何なのだろう。人と人とを隔てる境なのだろうか。

僕が今回感じた国境は、地図上のただの線でしかなかった。僕にはすばらしい友だちがたくさんできた。そこに国の違いはあまり感じなかった。握手を交わすたび、僕の中にあたたかいものが入ってくるような気がした。

グロジョガンのみんなと約束をした。いつか必ずこの村に戻ってくる、と。その時まで彼らにはずっと笑っていてほしい。

地震があった事実を忘れてはいけない。つらい思いをする子どもたちのことも。彼らと共に、困難をこえていきたいと思う。長い道のりになるかもしれない。しかし、

僕らと彼らとは、決して遠い存在ではないし、日本とインドネシアの距離もそれほどはなれていないのだ。

彼らとずっといっしょに笑っていたい。

大切なことを教えてくれたみんなに、現地の言葉で一言。Matur Muwun. 本当にありがとう。

2006年夏休み 友情のレポーター 安江 一穂